
年下の悪魔 番外篇

理尚はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年下の悪魔 番外篇

【Nコード】

N0418D

【作者名】

理尚はじめ

【あらすじ】

連載中の「これって恋ですか」年下の悪魔篇の番外篇になります。メインの二人がうまくいってくれたらこんなラブラブハニーな日もあるのかなと。

(前書き)

これって恋ですか を読まなくてもわかるように書いてありますが、よろしければぜひそちらから。

「あっ」

「え？」

あっ————っっっ」

海で遊んで温泉旅館で一泊、社員旅行としては世知辛いほどにしよう。コートダジュールは無理にしても、せめて沖縄、せめて有名温泉地。社員たちの熱望をきれいに無視し、総務が選んだのはシーズン真っ只中にも他の観光客がほとんどいないほど寂れた海辺の町だった。間違いなく予算だけで選択されたと思われる。

海水浴場も白い砂がきれいで、遠浅のせいか波も静かではあったがとにかく狭い。砂浜の両側はすぐ岩場になっていた。閉鎖空間のあちこちに見知った顔が——会社と少しも変わらない。おまけに天気も微妙だ。

「台風きてるみたいだな」

彩花はうす曇の空を見上げた。

「視界に入るのが同社の人間だけだから旅先って感じしませんね。現地集合だったのに」

隣でジュリアがぼやいた。

「電車もバスもみんな知った顔なんでもん。こんなじゃひと夏のアバンチュールが期待できませんよー」

白いビキニがローストしたアーモンドみたいな肌によく似合っていた。モデルみたいな水着姿に老いも若きも男たちが口をぽかんと半開きにして見とれている。

「いいんじゃない。ジュリアがそんなの期待したら性犯罪に巻き込まれそう」

ジュリアは日本とブラジルのハーフらしく、両国の良い所取りし

た美人だ。彼女がナンパ待ち顔でうろついたら、普通の海水浴場ではきつとタダではすまない。

「ところで先輩、どうしてパーカーなんて着てるんですか」

「さっ、いきん、太っちゃって」

彩花は明後日の方に顔を向けて笑い声をあげた。

「うっそだー。先輩地味だけどスタイルだけはいいいじゃないですか。隠しても女同士だとそんなのバレバレー」

「えーあっ、……あっ、やめっ、ああっ」

胸を揉むな、胸を！

ジュリアは後輩としても、人間としても遠慮なく、彩花の胸をもぎゅもぎゅと掴んだ。そして首を傾げる。

「あれー、先輩この水着、パットは？」

「わー忘れたっ」

「器用ですね。普通縫い付けてありませんか」

「ジュリアさん」

名を呼ばれてジュリアが振り返った。

彩花は息を切らして後輩の手が届かない場所まで離れた。まったくなんてことを公衆の面前で。

彩花を救ってくれたのは西條だった。

西條は業績でも『社内で彼氏にしたい男』でも常にトップ争いに加わっている爽やかで可愛い男前だ。顔立ちのきれいさには慣れていても見とれてしまう。華奢に見えるのに、スーツを脱いだら結構男らしい。

西條は急ごしらえのコートを指差し、

「ビーチバレーが始まるから来てくれって。エントリーしてるよね」

「しましたよ。だって優勝したら十萬円の商品券もらえるんだもん。じゃあ先輩旅館に戻ったら夜卓球しましょうね」

人生の半分を海外で過ごしたにしては日本文化に通じている。温泉旅館イコール卓球という図式は日本文化だ、と思う。

バレーコートの人に人が集まりだし、彩花がいる場所は寂しく

なりだしていた。だが西條が隣から動かない。

「商品十万円だって。行かないの？」

彩花は隣を見ずに尋ねた。そのつれない素振りを責めるように手を握られた。

「だって先輩を独り占めできるチャンスですから。行きましょう、ボート借りました」

人目を気にする彩花は引きずられるようにして岩場に連れ込まれた。浮かんでいたのはゴムボート、でもちゃんとオールもついている。

西條は沖合を指差した。

「あの小さな島、あそこに小さな砂浜があるそうですよ。二人きりならいいでしょう。本当は皆の前でいちゃいちゃしたいけど」

「いやです。嫉妬で殺される」

島まで深いところでも二メートルくらいしかないそうだ。ちよつと頼りないボートではあるが転覆して溺死事故となる心配は不要だろう。

帽子か日傘が欲しい。曇っていても夏の日差し、やはり暑い。

「交代しようか」

彩花はオールを握る西條に気遣わしげな眼差しを向けた。

西條は笑って、大きく漕いだ。もう半分ほどまできた。砂浜からゲームの歓声は聞こえるが、その姿は小さくなっていた。

「冗談でしょう。先輩の腕じゃ朝になっても着きません」

「その善人面でその毒舌。今夜の宴会で暴露したら、本性を」

「そんな。魅力倍増で余計もてちゃう」

「厚かましい」

「先輩」

「何よ」

「パーカー脱いだらどうですか。暑いでしょう」

清涼飲料水のCMみたいな爽やかな笑顔は、言い終わった途端海水を強かに受けた。

西條は海水を滴らせて唇を尖らせた。

「ひどい先輩」

「どっちよひどいのは。水着これしか持ってきていないのに」
昨夜荷物の辺りでゴソゴソやっているのは知ってはいたが、まさかこんな細工をするとは。

「海に入れないじゃないっ」

パットがない水着なんて濡れたら透けるし形は浮くし、卑猥なところの上ない。海と温泉しかない旅行で楽しみの片方を奪われたと知った彩花が怒ってもそれは当たり前だ。

西條は滴る水を手の甲で拭いながら、濡れた前髪の間で強く眼差しを光らせた。

彩花は絶対に自分が間違っていないと自信があるのに、ついときりと胸を騒がせてしまった。

「だって先輩の水着姿、他の男に見せたくなかったし」

「これ選んだの、西條でしょうっ」

「だからおれ専用だってば」

すっきりしたピンクに極小の銀色ドット、遠目にはパールが入った青みの強いピンク色に見えるセパレートで、西條が半ば強制して買わせたものだ。買ってくれると言われたがそれだとなにをされるかわからないので自分で買った。

「わがままもいい加減にしなさい」

彩花は腕を組み、じろりと睨みつけた。

「自分はちゃらちゃら脱いで女の子たちをひきつけていたくせに」
その上半身裸の吸引力は科学薬品使用を疑いかねないほどだった。
西條がふっと微笑んだ。

「嫉妬してる？」

「なっ——」

甘いいじわるな揶揄に、彩花は思わず赤面して立ち上がった。

「あっ」

忘れていた。今どこにいるのかを。

「え？」

足元がぐらっときた瞬間、バランスを崩して視界がぐるっと回転した。西條が手を掴んでくれたが間に合わない。太陽を仰いだかと思った瞬間、

「ぎゃ——っつっつ」

背中から海中に放り出された。

足がつくのをわかっていたからパニックには陥らなかったけど、それでも心臓がばくばくなるくらいには驚いた。

彩花がなんとか体勢を立て直し海面に顔をだそうとぼたついていると、すぐそばに真っ白い泡が立って、ぐっと身体が水面に押し出された。

「大丈夫ですかっ」

額が裸の胸にぶつかった。

強い腕の中で深呼吸を繰り返すうちに心拍数も落ち着いていく。

「……大丈夫」

「すいません。からかって」

水深は彩花でちょうど胸の辺り、足元は砂地で裸足でも痛くない。日差しに焼かれていた肌に冷たい海水が気持ちよかった。

「先輩泳げますか」

「それなりには」

「——なんだ残念」

聞こえてる。泳げなかったら何をするつもりだったんだ、この男は。

「海の中も気持ちいいですね」

「ボートひっぱって泳いでいく？」

「ああ、そういう意味じゃありません」

「どういう意味？」

確認するのに言葉はいらなかった。

西條の手がいきなりパーカーの前を開いたからだ。彩花は咄嗟に平手でその頭をはたいた。

「このおパカッ」

「海の中でしたことないから。やってみましょう」

ぐっしより濡れたパーカーを器用に奪い去ってゴムボートの中に放り込む。

「暑さに頭が沸いたんじゃないっ？」

「まさか先輩、海でしたことあるから嫌がってる？」

「したことはないけど嫌がってます。手を離せっ……」

ウエストをがっちり掴まれて逃げられない。必死に足をばたつかせるものの、悪戯に砂を巻き上げただけに終わった。

下から持ち上げるように、西條の手が胸を包んだ。

耳元で低く囁かれて、条件反射のように彩花は背をびくんっと竦ませた。自然に顎があがってしまう。

「やっぱり、水に入っちゃいけませんね」

促されてそつと見ると、尖った乳首が水着を押し上げていた。張りりと光沢はあるけれど薄い布地だ。つんと主張するその様はとにかく――。

「いやらしすぎて触りたくなる。触ってもいいですか」

「あぁっ……んん、やった、……や」

冷たい水に刺激されて硬くなった。と、主張しても絶対に通用しない感覚が、西條の指先に擦られている先端から胸全体に広がる。西條は指先がかすめるくらいに弾くだけだ。もどかしくておかしくなりそう。彩花は後ろから回されている西條の腕に縋って背中を仰け反らせた。

「つく、ん……ふうっ……つつ」

「気持ちよさそうですよ先輩」

耳朶を唇がそつと噛む。息が奥を擦りぞくぞくつと電気みたいに走り抜けたものに小さな悲鳴をあげてしまった。

「こっちを持ってください」

腕にすがっていた手を外されてボートの縁に誘導された。柔らかなゴムの頼りなさをいやがって首を振るのに西條はそれを許さない。

「しっかり持っていてくださいね。ボート、流されたら泳いで帰らないといけない。パーカーもボートの中だから。わかってます先輩？」

「あああっ……や、それ……やだっ……っ」

胸の尖りきった先端をぎゅっと抓るようにひっぱられた。かすかな痛みを押し流す快感に貫かれる。

「ぴくぴく震えているこれを皆の前に晒すことになリたくなかったら、ちゃんと持っていてくださいね」

西條は自由になった手を彩花の足の間に差し込んだ。

皮膚が柔らかい内股を撫であげられて彩花はゴムボートに指先を食い込ませた。

「はう……んっ」

焦らさずに指はいきなり足の付け根を探った。水着の上から合わせ目をこすられて震えが止まらない。

手の平全体で覆うようにして揉まれるとじりじりとしたもどかしいような気持ちよさに身悶えてしまう。

「ん……んっ……やあっっ」

やり場のない感覚を振り払うようにゴムボートの縁を握り締めて額を押し付ける。下を向くと透明な水の中で弄ばれている様子が目に飛び込んできた。慌てて目を瞑る。

「砂が入ると困るから、このまま水着の上からだけにします。でも気持ちよくならないかな？」

「やだ……って、もう、や」

「ぬるついてきた。ねえ先輩、なんだか海水じゃないみたいなのが溢れてきましたよ」

「んっ……っっ」

「すぐ脱がせられる水着を脱がさず、あくまでその上から——なんてなんだかいやらしいですよね？」

「……………」

完全にぐったりした彩花を、西條はボートに戻すと目的地だった島を目指した。本懐は遂げる青年だ。

誰もいないビーチにたどりつき、そこで起きた事について、彩花は終生口を閉ざしたいと思った。

二人が昼からたっぷり夕方までの時間をそこで過ごしたことだけは確かだ。疲れ果てたせいでジュリアとの卓球の約束を果たせなかったことも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0418d/>

年下の悪魔 番外篇

2010年10月8日14時02分発行